

子どもの悩みや不満と相談相手

—小学4～6年生と中学生を対象に—

研究開発室 下開 千春

—要旨—

- ① 過去1年間に悩みや不満があったと回答した割合は、小学4～6年生の男子で約4割、女子で約半数、中学生では男子が約半数、女子が6割を超えていた。
- ② 過去1年間の一番大きな悩みや不満として、中学生男子は「将来や進路のこと」(34.7%)、中学生女子は「友だちのこと」(29.2%)が最も多い。小学4～6年生では、男女ともに「友だちのこと」(男子27.6%、女子40.3%)が最も多かった。また、悩みがあったと回答した小学4～6年生男子のうち、15.5%が「いじめのこと」が一番大きな悩みだったと回答している。
- ③ 「いじめのことで悩んだ」と答えた子どもを持つ母親のうち、「子どもがいじめにかかわり悩んでいたことを把握していた」母親は約6割となっている。
- ④ 悩みや不満を持つ小学4～6年生、中学生では、いずれも8割以上が「だれかに相談した」と回答している。相談した相手は、中学生女子を除き「お母さん」が最も多い。「お父さん」に相談する割合は、「お母さん」に相談する割合の半分に満たなかった。
- ⑤ 悩みや不満があったにもかかわらず、だれにも相談しなかった理由として最も多かったのは、「自分で解決したかった」(48.6%)であった。

1. はじめに

小児保健では、子どもたちの健康を守るにあたり、これまでの疾病予防から、心の問題の対処へと重心が移りつつあり（奥山 2007）、学校や家庭での子どもたちの悩みの把握や必要に応じた対応が求められている。そこで、本稿では、子どもたちがどのような悩みや不満を持っているのか、悩みを相談することはあるのか、相談相手となっている人はだれかについて調べた結果を報告する。特に、子どもの心の悩みとして深刻であり、社会的な問題ともなっているいじめに関して、母親は自分の子どもの状況をどの程度認識しているか、その調査結果を示す。

調査概要は図表1のとおりである。なお、筆者は、当研究所が実施した調査の中で子どもの悩みや不満と相談相手についての結果の一部を既に報告しているが*¹本稿

ではさらに分析を進めた結果を示す。

図表1 調査概要

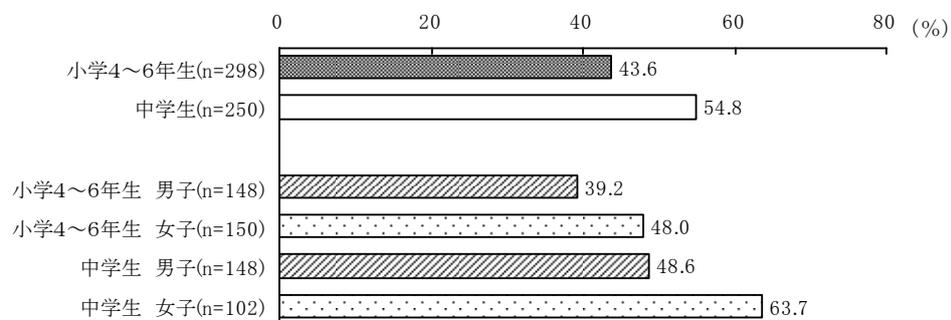
調査名	子どもの生活に関するアンケート調査
調査対象	当研究所生活調査モニターのうち中学3年生までの子どもをもつ父母1,078組、およびその子どもうち小学4年生～中学3年生のもの(当該子が複数いる場合は最年長子のみ対象) 567人
有効回収数(率)	父親 927人 (86.0%) 母親 930人 (86.3%) 子ども 548人 (96.6%)
調査方法	郵送調査
調査時期	2007年3月

2. 悩みや不満

(1) 悩みや不満の有無

過去1年間に悩みや不満があったかどうか、小学4年～中学生にたずねた。悩みや不満があったと答えた割合は、小学4～6年生(43.6%)より中学生(54.8%)で高い(図表2)。また、性別では、小学4～6年生(男子39.2%、女子48.0%)、中学生(男子48.6%、女子63.7%)ともに、男子より女子で高くなっている。

図表2 「過去1年間に悩みや不満があった」子どもの割合(性・就学状況別)(子どもの回答)



(2) 悩みや不満の内容

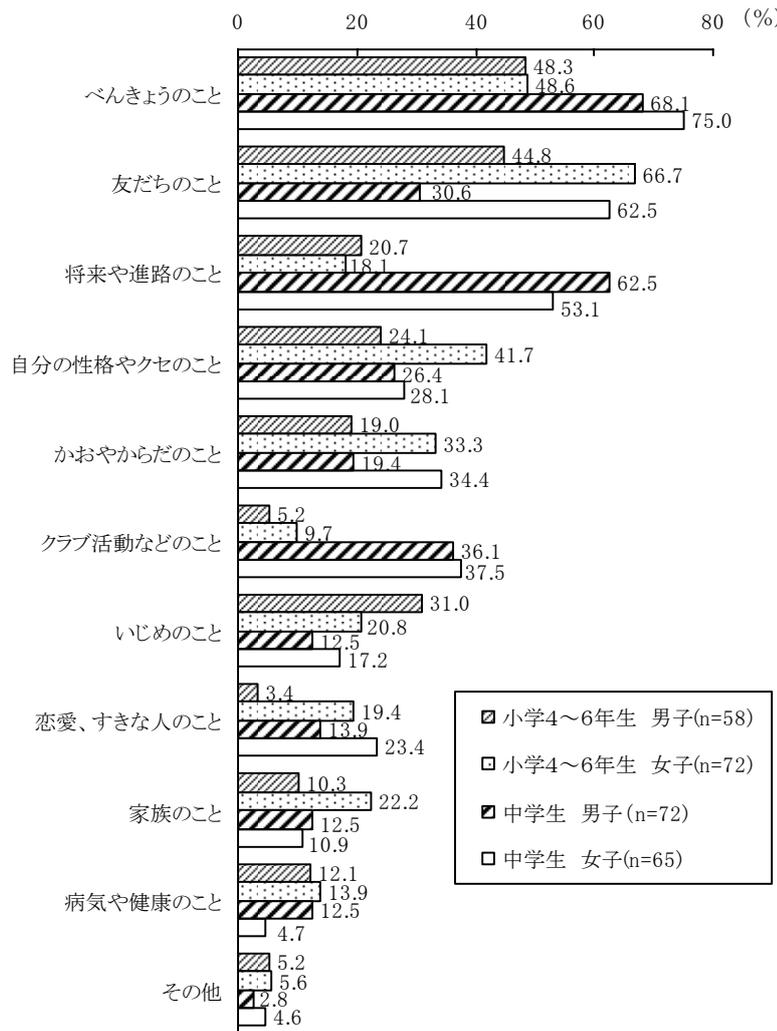
1) 過去1年間の悩みや不満

「過去1年間に悩みや不満があった」と答えた子どもに、その内容をたずねた。

性・就学状況別で見ると、小学4～6年生では、男子・女子ともに「べんきょうのこと」(男子48.3%、女子48.6%)が多い(図表3)。ただし、女子では、「友だちのこと」(66.7%)が最も多く、その他、「自分の性格やクセのこと」(41.7%)、「かおやからだのこと」(33.3%)といった自身のことや容姿への回答も少なくない。一方、男子では、「友だちのこと」(44.8%)、「いじめのこと」(31.0%)など、友人関係の悩みや不満が多くみられる。

中学生では、男子・女子ともに「べんきょうのこと」(男子68.1%、女子75.0%)が最も多い。次いで、男子では、「将来や進路のこと」(62.5%)、「クラブ活動のこと」(36.1%)と続き、女子では、「べんきょうのこと」(75.0%)、「友だちのこと」(62.5%)、「将来や進路のこと」(53.1%)、「クラブ活動のこと」(37.5%)、「かおやからだのこと」(34.4%)の順となっている。

図表3 過去1年間の悩みや不満(性・就学状況別)＜複数回答＞(子どもの回答)



注:小学4年生～中学生で、悩みや不満があったと答えた子どもの回答結果

2) 過去1年間の一番大きな悩みや不満

悩みや不満があったと答えた子どもに対して、「過去1年間に一番大きな悩みや不満が何であったか」たずねた。その結果、小学4～6年生では、男子・女子ともに「友だちのこと」(男子27.6%、女子40.3%)が最も多く、友だちに関する悩みが多い(図表4)。また、小学4～6年男子のうち、15.5%が「いじめのこと」が一番大きな悩み

だったと回答している。中学生男子では「将来や進路のこと」(34.7%)、中学生女子では「友だちのこと」(29.2%)が最も多い回答であった。

図表4 子どもの過去1年間の一番大きな悩みや不満(性・就学状況別)(子どもの回答)

(単位:%)

	全体 (n=267)	小学4～6年生		中学生	
		男子(n=58)	女子(n=72)	男子(n=72)	女子(n=65)
友だちのこと	25.5	27.6	40.3	5.6	29.2
べんきょうのこと	19.5	22.4	16.7	18.1	21.5
将来や進路のこと	16.9	12.1	4.2	34.7	15.4
いじめのこと	8.6	15.5	8.3	5.6	6.2
クラブ活動などのこと	6.4	1.7	0.0	13.9	9.2
恋愛、好きな人のこと	5.2	1.7	1.4	5.6	12.3
かおやかからだのこと	4.9	5.2	8.3	4.2	1.5
自分の性格やクセのこと	3.7	1.7	9.7	2.8	0.0
病気や健康のこと	3.7	5.2	4.2	2.8	0.0
家族のこと	3.0	1.7	2.8	2.8	0.0
その他	1.9	5.2	4.2	2.8	3.1
無回答	0.7	0.0	0.0	1.4	1.5

注1:小学4年～中学生で、悩みや不満があったと答えた子どもの回答結果

注2:太字は最も割合が高い項目

3. 子どものいじめに関する母親の把握

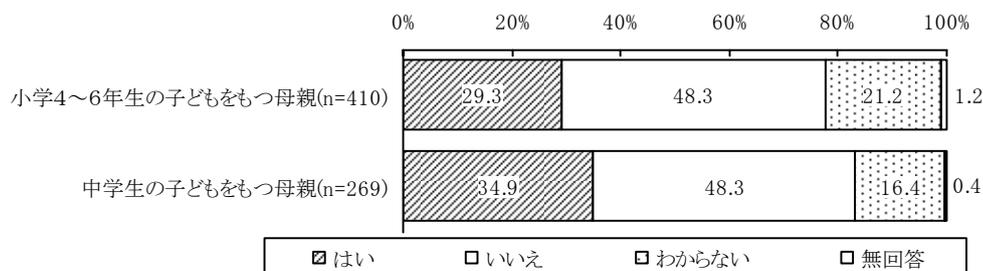
(1) 子どものいじめの悩みと母親の把握

次に、子どもの悩みの中でも、社会的に問題となっているいじめに焦点をあて、子どものいじめに関する母親の把握状況をみる。

1) 学校でいじめは問題になっているか

まず、「現在、学校でいじめは問題になっているかどうか」について母親にたずねたところ、「学校でいじめが問題になっている」と答えた母親は、子どもが小学生の場合には29.3%、中学生の場合には34.9%となっている(図表5)。

図表5 現在、子どもの学校でいじめは問題になっているか(就学状況別)(母親の回答)

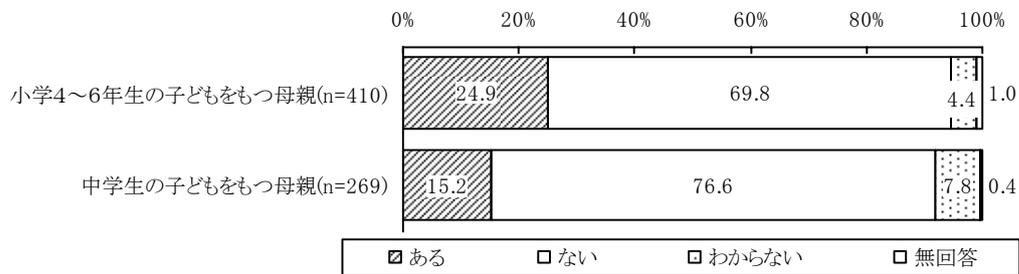


「子どもの学校でいじめが問題になっているかどうかわからない」と回答した割合は、小学4～6年生の母親で21.2%、中学生の母親で16.4%といずれも2割前後となっている。

2)子どもがいじめにかかわって、悩んだことはあるか

次に、「過去1年間に子どもが加害者または被害者として、いじめにかかわり悩んだことがあるか」母親にたずねた。その結果、「過去1年間に悩んだことがある」と回答した割合は、小学4～6年生の子どもをもつ母親が24.9%、中学生を子どもにもつ母親が15.2%であった（図表6）。

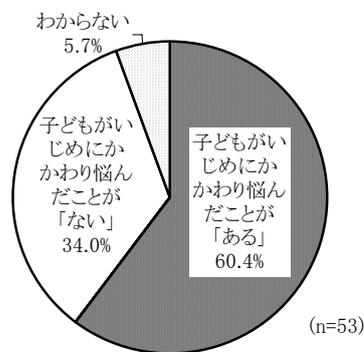
図表6 過去1年間に自分の子どもがいじめにかかわって(被害者・加害者として)悩んだことはあるか(就学状況別)(母親の回答)



今回の調査では、子ども自身にも、「過去1年間の悩みや不満としていじめのことを悩んだかどうか」たずねている。そこで、「過去1年間にいじめのことについて悩んだ」と回答した子どもについて、その母親が子どものいじめの悩みを把握していたかどうかみてる。

「過去1年間にいじめのことで悩んだ」と回答した子どもを持つ母親(53人)のうち、「子どもがいじめにかかわり悩んでいたことがある」と回答した母親は60.4%となっている(図表7)。

図表7 「いじめのことで悩んだ」と回答した子どもをもつ母親の子どものいじめについての悩みの把握状況(母親の回答)



注:小学4年～中学生で、「いじめのことで悩んだ」と答えた子どもをもつ母親の回答

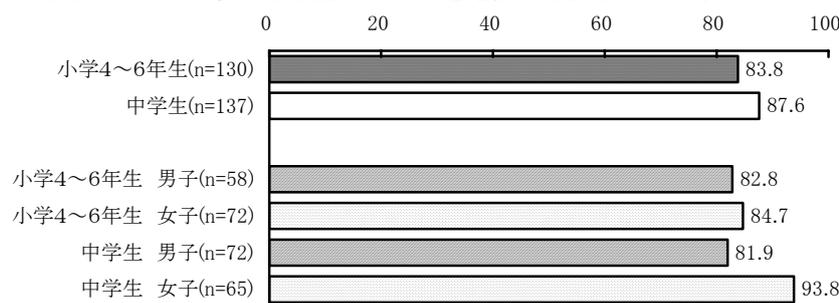
しかし、3人に1人の母親が「子どもがいじめにかかわり悩んだことはない」と回答している。「わからない」(5.7%)と答えた割合をあわせると、「いじめについて悩んだことがある」と回答した子どもをもつ母親の約4割が、子どもがいじめにかかわって悩んでいたことを知らなかった。

4. 子どもの悩みや不満の相談

(1) 悩みや不満の相談と相談相手

悩みや不満があったと答えた子どもに一番大きな悩みや不満について、だれかに話したり相談したりしたのかどうかをたずねた。だれかに相談した割合は、小学4～6年生(83.8%)、中学生(87.6%)ともに8割以上と高い(図表8)。男子と女子の差をみると、小学4～6年生では特に差はみられないが、中学生では男子(81.9%)より女子(93.8%)で相談をした割合が高い。

図表8 過去1年間の一番大きな悩みや不満を相談した割合(性・就学状況別)(子どもの回答)



注: 小学4年～中学生で、悩みや不満があったと答えた子どもの回答結果

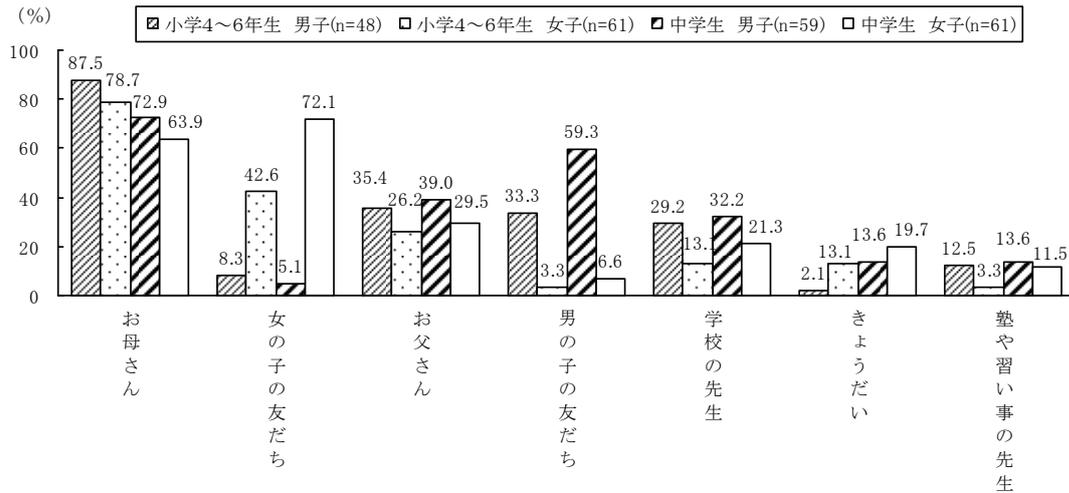
次に、悩みや不満についての相談相手をたずねた。性・就学状況別でみると、中学生女子を除き、「お母さん」が最も多く、中でも小学4～6年生の男子(87.5%)で最も高い(図表9)。「お母さん」と回答した割合は、男子・女子ともに、小学4～6年生が中学生を上回っている。

小学4～6年生の男子では、「お母さん」に次いで、「お父さん」(35.4%)、「男の子の友だち」(33.3%)、「学校の先生」(29.2%)の順となっている。一方、女子では、「お母さん」に次いで「女の子の友だち」(42.6%)が多く、「お父さん」は男子に比べて26.2%と低い傾向にある。

中学生男子では、「お母さん」の次に、「男の子の友だち」(59.3%)が多く、「お父さん」(39.0%)、「学校の先生」(32.2%)が続いている。中学生女子では、「女の子の友だち」(72.1%)が最も多く、次いで「お母さん」(63.9%)、「お父さん」(29.5%)の順となっている。中学生では、男子・女子ともに、同性の友だちが相談相手となっている割合が高い。

全体的に「お母さん」に相談する割合が高い一方、「お父さん」に相談した割合は、小学4～6年生、中学生ともに、男子で4割未満、女子で3割未満と、男子でやや高い。「学校の先生」や「塾や習い事の先生」への相談割合も、同様の傾向にある。親族の中でも、「祖父母」に相談した子どもは1割に満たなかった（図表省略）。

図表9 過去1年間の一番大きな悩みや不満の相談をした相手(性・就学状況別)＜複数回答＞
(子どもの回答)



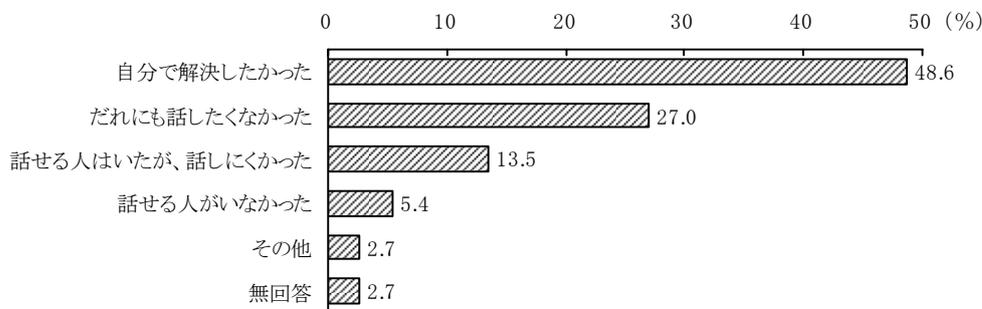
注1:小学4年～中学生で、悩みや不満があったと答えた子どもだけの回答結果

注2:回答率がいずれも1割未満の「おばあさん」「保健室の先生」「おじいさん」「近所や地域の人」「その他」は表記していない

(2) 悩みや不満を相談しなかった理由

過去1年間の一番大きな悩みや不満について、相談しなかったと答えた子ども(37名)に、その理由をたずねた(図表10)。その結果、「自分で解決したかった」(48.6%)が最も多く、次いで、「だれにも話したくなかった」(27.0%)であった。性別による回答の差はみられなかった(図表省略)。

図表10 過去1年間の一番大きな悩みや不満について相談しなかった理由(子どもの回答)



注:小学4年～中学生で、悩みや不満があると回答したが、相談しなかったと回答した子どもの回答結果

5. まとめ

過去1年間に悩みや不満があったと回答した割合は、小学4～6年生の男子で約4割、女子で約半数、中学生の男子では約半数、女子は6割を超えていた。

過去1年間の悩みや不満の内容として最も多かった内容は、小学4～6年生では男子で「べんきょうのこと」、女子で「友だちのこと」、中学生では、男女ともに「べんきょうのこと」となっていた。これに対し、過去1年間の一番の悩みや不満は、小学4～6年生では男子・女子ともに「友だちのこと」であり、中学生男子では「将来や進路のこと」、女子では「友だちのこと」となっている。

社会的に問題となっているいじめについて、過去1年間に悩みや不満があったと回答した割合は小学4～6年生の男子で31.0%みられた。また、過去1年間に悩みや不満があったと答えた子どものうち、一番大きな悩みや不満に「いじめのこと」をあげた割合が最も高かったのは小学4～6年生の男子で15.5%であった。このように、一部ではあるが、いじめについて悩む子どもがいる中で、過去1年間にいじめについて悩んだと答えた子どもをもつ母親のうち約6割が、子どもがいじめにかかわり悩んでいたことを把握していた。

過去1年間で一番大きな悩みや不満については、子どもの8割以上がだれかに相談している。相談しなかった子どもの理由としては、「自分で解決したかったため」が約半数で最も多かった。

悩みや不満の相談相手を見てみると、性別では、父親を相談相手とする割合は女子より男子で高く、男子にとって父親は同性として相談できる相手となっているようだ。また、男子・女子ともに、同性の友だちを相談相手とする割合が高いなど、性別によって相談相手に違いがみられた。

家庭内の相談相手として父母を比較すると、父親に相談する割合は、母親に相談する割合の半分に満たない。子どもの悩みや不満の内容にもよるが、子どもの悩みの相談相手、心のサポート役としての父親が増えていくことが期待される。

(研究開発室 副主任研究員)

【注釈】

- *1 この調査全体の概要、および、子どもの悩みや不満と相談相手に関する結果の一部は、『Life Design REPORT』2007年9-10月号で紹介している。

【参考文献】

- ・奥山眞紀子, 2007, 「子どものメンタルヘルスを担う人材を育成する 医師の立場から」『小児保健研究』66(2) : 183-185.